

# 石川の伝統工芸

シリーズI

輪  
島  
塗  
山  
中  
漆  
器  
九  
谷  
焼

作  
り  
手

売  
り  
手

使  
い  
手

今を知る

石川・金沢は江戸時代から息づく美術工芸のレベルが高く、作家活動も盛んです。国指定の伝統工芸は10種、県指定が6種、希少伝統工芸が20種もあり、全国的にみてもその数は上位ランク。輪島塗、山中漆器、九谷焼は、その産地ごとに次世代を育てるための研修所が開設され、技術を学びに全国各地から集まっています。そんな若き工芸家たちがイキイキと制作する石川の伝統工芸をシリーズで紹介していきます。



芝山 佳範

金沢市出身。石川県輪島漆芸技術研修所で学んだ後、昨年人間国宝に認定された西勝廣氏の工房で修業。現在は津幡町を拠点に活動



←ノミが生む点・線・面を組み合わせて絵を描く



↑沈金箱「月影」



↑被災地の復興を願った「FLOWER」市はツバキ、市町のツツキ、ユキワリなどをあしらう



しばやま よしのり  
沈金師 芝山 佳範さん



↑沈金聚「韋駄天」

## 漆黒の宙に沈む金、浮かぶ光 独自の世界をノミで彫り拓く



↑漆を刷り込んだ溝の中を金粉や金箔で埋める



↑多様な道具を使い分けてより豊かな表現に

「点と線と面で構成する沈金は、透明感のある奥深さや繊細でリアルな表情が持ち味。そんな魅力を存分に発揮できるように、自然の生物などをモチーフにコトコトと、無心に手を動かしています。漆の可能性をもっと引き出して、より楽しい漆器が提案できれば」と、国内はもとより海外への発信にも尽力。伝統工芸の明日を見据える芝山さんです。

夜空に浮かぶ月は青白く輝き、月光の下では藤が枝垂れ咲き……。何とも幽玄な情景を漆に誘っているのは、沈金という輪島塗の加飾技法。専用ノミで漆器表面に模様を彫った後、彫り跡に接着用の漆を刷り込み、そこに金粉や金箔を埋め込んで絵柄を浮かび上がらせる伝統技術です。作者は、「中学時代に沈金に惹かれたのが縁でこの道に」と語る芝山さん。輪島塗は完全分業制ですが、当初から金沢を拠点とする予定だったため、分業には頼れないだろうと考え、塗りと沈金双方を輪島の研修所で習得。企画・制作・販売を一人で担うというスタイルを貫いています。



↑研ぎ澄まされたフォルムと独自の質感に職人魂が宿る

輪島塗は能登半島の輪島で生産される漆器であり、その発祥は室町時代にまで遡ると伝わります。一帯に漆の木や材料となる木材が豊富なことや漆器づくりに適した気候に加え、研鑽を重ねてきた職人たちの存在が、輪島塗を漆器の最高峰と称される能登の手仕事へと押し上げました。

輪島塗の工程は、大きく木地、塗り、加飾に分かれ、さらに細分化された分業制です。その手数は100を超え、完成までに一年以上かかることも珍しくありません。また、この地域でとれる珪藻土を使った「地の粉」を下地に用いることで強度が増し、一生ものと言わしめる堅牢さが生まれます。伝統の技は表現の世界にも昇華され、これまで優れた人間国宝を輩出してきました。令和6年の能登半島地震は輪島塗の里に甚大な被害を与えましたが、日本が誇る伝統工芸を絶やすことがないよう、多くの関係者が復興に向けての努力を重ねています。

### 見るならココ!

#### 石川県輪島漆芸美術館

いしかわけんわじましつげいびじゅつかん



日本の漆芸のなかで最初に重要無形文化財に指定された輪島塗の名品を収蔵・展示しています。さまざまな切り口で漆芸の魅力にせまる企画展を開催するほか、常設展では輪島塗の技や歴史を道具や映像などで分かりやすく紹介。あらかじめ文様が彫られたスプーンや箸に色を付ける沈金体験もでき、より身近に輪島塗の世界にふれることができます。

☎ 0768-22-9788  
住 石川県輪島市水守町四十苅11  
料 入館630円(体験は別途、要予約)  
時 9時~17時 休 無休 P 42台

輪

島

塗

堅牢にしてこの上なく優美。  
漆器の最高峰として名を馳せる



↑手や唇の感触が違う輪島塗で食すと、味わいも格別。気に入った器の購入も可能



↑目を見張る一品が次々に。器の使い方の提案も



料理人  
奥村 仁さん

☎ 090-4740-4177  
 住 石川県金沢市木倉町5-2  
 時 17時～22時30分LO(2階は要予約)  
 休 火曜 Pなし

使  
い  
手

田谷漆器店 CRAFEAT  
クラフアイート

珠玉の器で感動の旬味を  
目で舌で、五感で味わう伝統工芸

創業200余年の輪島塗の老舗・田谷漆器店が手がける金沢市木倉町の料理店。輪島塗を中心に、石川が誇る伝統工芸の器で石川の美味を楽しんでもらおうとの思いから、CRAFEATとEATから成る店名が生まれました。田谷漆器店は能登半島地震で甚大な被害を被りましたが、復活に向けていち早く再起。クラフアイートもまた金沢から

の復興支援  
に尽力して  
います。



↑カウンター奥に並ぶ漆器は購入も可能(2階)

その最大の魅力は、気鋭の料理人奥谷仁さんが繰り広げる、器と旬味との感動の食体験。地物の海鮮を選びすぎり、加賀野菜などは生産地に出向いて入手。豊かな創造性で極上の味わいに仕立て上げ、見事な輪島塗に寄り添わせて提供しています。1階の和風バルでは気軽にアラカルト350円、2階では予約制のコース料理1万1000円と目的に応じて使えるのもファンたちに喜ばれています。



蔦屋漆器店

●つたやしっきてん



輪島塗の復活に向け、一步一步前を向く漆のプロデューサー

蔦屋は江戸末期の創業。輪島塗の企画・製造から販売までを担う総合プロデューサーとして、6代目の当主・大工素也さんに至る塗師屋の歴史を連綿と繋ぎ続けています。素也さんが従来の販売スタイルを踏襲して全国の得意先に行商し、寺院向けの仏具や什器などを手がける一方で、女将の佳子さんは「現代の食卓にもっと漆を」との思いから、漆器を取り込んだテーブルコーディネートや心豊かなライフスタイルを提案。夫婦で新旧両



女将  
大工 佳子さん

蔦屋漆器店代表  
大工 素也さん



↑愛らしい小丸椀は和にも洋にも使える



↑時代椀(左)など魅力的な椀が揃う



↑マルチに活躍する焼酎カップ

●蔵ギャラリー(要問合せ)  
 ☎ 0768-22-0072  
 住 石川県輪島市河井町3-103  
 時 10時～17時  
 休 不定休  
 P 2台



↑漆器を取り入れたテーブルコーディネート提案も多彩に



↑木の状態を見極めながら慎重に仕上げ、刃物の管理も念入りに

口出 雅人

石川県加賀市出身。高校卒業後、山中漆器工芸に入社。木地師のキャリアを重ねながら工房代表として産地の継承に尽力

木を知り抜き、技を新たに、挽物の伝統を次代に引き継ぐ



木地師 口出 雅人さん

くちで まさと



↑制作途中の器が山積み。注文は全国各地から舞い込む

←山中の主流は丸太から取る縦木取りだが、当工房は横木取り



↑製品の寸法に合わせて板から切り出す



↑切り出した木を機械で荒挽き



↑木地の状態を見極めつつ旋盤で仕上げ

木地挽きの技や職人層の厚さは日本一と言われる山中漆器。他産地の衰退に伴って県外からの注文が増えており、木地師歴45年の口出さんが代表を務める山中漆器工芸では10人程の職人が作業に励んでいます。

木地づくりは木取り、荒挽き、仕上げ挽きなど数工程あり、口出さんが特に得意としているのが仕上げの精確さです。ミリ単位の要望に応えるべく機械化を進め、ろくろ旋盤を導入して精度や生産性を高めると同時に担い手育成にも繋げています。「とはいえ自然の木は季節や天候で変化するもので、最終の仕上げは職人の感覚が頼り」と、技の研鑽・継承に余念がありません。

また、木を知り抜く達人は乾燥法にもこだわります。工房が使うのは、従来の縦木(丸太)に比べ材料効率の良い板状の横木。これを日干しした後、乾燥室で水分を極限まで減らし、次に蒸気をあてて日干しの状態に戻す作業を行って木の変化を少なくしています。伝統を未来に繋ぐために、技の革新にも力を注ぐ口出さんです。



↑日常生活に溶け込む作品が多いのも山中漆器の魅力。写真は喜八工房:ケヤキの糸筋椀

山中漆器とは、加賀市の山中温泉周辺でつくられる漆器で、山中塗とも呼ばれています。古くからこの地にはろくろを用いて椀や盆をつくる木地師が多く居住し、現在も挽物では全国一の生産量を誇っています。よく「塗りの輪島、木地の山中」と称されるように、山中漆器最大の特長は木目を生かすことにあり、光が透けるほど薄く仕上げる薄挽き、木面に繊細な模様を刻む加飾挽きなど、職人たちの高い技術が多くの技法を生み出してきました。木が育つ方向に器の形をとる縦木取りでつくられた漆器は、乾燥による歪みが出にくく、長い年月愛用することができます。

現在も、木地師として初めて人間国宝に認定された川北良造氏をはじめ、多くの木地師が活躍しており、日常に彩りを添える山中漆器に出会うことができます。また一帯には、職人の手ほどきを受けながらろくろ挽きを体験できる工房も点在しています。



↑山中漆器伝統産業会館では、ろくろ挽きの手仕事を見ることができる

見るならココ!

山中座

やまなかざ



↑人間国宝川北良造氏のドア取っ手



↑ろくろ技術を応用した手すり

名湯として有名な山中温泉の女湯(菊の湯)に併設し、漆塗りの柱や格子戸風の壁画、華麗な蒔絵(まきえ)を施した格天井のホールなど、随所に山中漆器の技が散りばめられています。毎週土・日曜、祝日には、山中節の民謡や芸妓の踊りなどが披露され、山中漆器に包まれた空間で温泉情緒漂う郷土芸能を堪能できます。

☎ 0761-78-5523  
 住 石川県加賀市山中温泉薬師町△1  
 料 館内見学無料(芸能鑑賞700円)  
 時 8時30分~22時(冬期は~20時、第2・4火曜は~17時30分)  
 休 無休 P 30台

山 中 漆 器

日本一の木地ろくろ挽き産地。木目の美しさが至宝の技を極める



畑漆器店 ●はたしっきてん

木地を主役にする新提案で、漆の器をもっと暮らしの中に

山中温泉ゆげ街道中程の、洒落た雑貨店のよ  
うな店構えが畑漆器店直営店。祖父の代から山  
中塗に携わってきたと語る畑学さんは、「漆器は  
扱いが面倒」と考えて敬遠する人が増えている状  
況に危機感を抱いていました。「木の良さをもっと  
知ってもらわねば」と。

そんな折、白木の器のニーズが高いことに気づ  
き、東京のデザイナーと開発したのが「color  
(カラー)」ブランドです。素地の木目や質感をで  
きるだけ生かそうと、拭き漆の技法をベースに無

鉛無臭のウレタンで塗装。挽物の技を駆使したシ  
ンプルなフォルムやポップな色が受け、大人気商品  
となりました。

以降新バージョンを次々に生み出し、世界の著名  
ブランドからOEMのオファーも。また、山中漆器  
の伝統を踏襲するブランド「卯之松堂」も再注目の  
れ手応えを感じています。奥様の真弓さんと試行  
錯誤を重ねながら、「山中の伝統を次代に引き継  
ぐのが私たちの役目」と、今日も温泉街のショッ  
プから全国へ、海外へ、漆器の魅力を伝えてい



畑漆器店代表取締役  
畑学さん

奥様  
畑真弓さん



↑ col. BORDER 3段セット 8,250円～



↑ 卯之松堂 フリーカップ 各4,400円



↑ 卯之松堂 汁椀・玉瀝 各4,950円



↑ col. KOMA 各4,180円 丸皿は蓋にもソーサーにも

☎ 0761-78-1149  
住 石川県加賀市山中温泉湯の出町レ23 商山堂ビル1F  
時 10時～17時  
休 水曜  
P 近くに共同無料駐車場

九 谷 焼

ジャパンクタニと謳われ、世界中の人々を魅了する色絵磁器



↑受け継がれてきた技法を継承しつつ、窯ごとの作風を確立。写真は九谷焼北山堂

九谷焼の歴史は明暦年間(1655～  
57年)以前に、加賀藩の支藩であった大  
聖寺藩(現在の加賀市周辺)の初代藩  
主・前田利治が生産を命じたことに始  
まります。その後、一度は忽然と姿を消  
しますが、約100年後に金沢城近くで  
復活。復活前の作品は古九谷、復活後  
のものは再興九谷と呼ばれています。

豪放な筆致の「青手」、九谷五彩と呼  
ばれる赤・緑・黄・紺青・紫で描く「色絵」、  
金と赤の濃淡で精密な文様を描く「赤  
絵」など、さまざまな技法で多様な美を  
生み出してきた九谷焼。明治時代には、  
盛んに海外に輸出されるようになり、博  
覧会等でジャパンクタニとして脚光をあび  
ました。

これまで九谷焼は、各時代に隆盛を  
誇った作風を受け継ぎつつ多彩な作品を  
生み出してきました。近年では現代の感  
覚を取り入れたデザインの九谷焼が次々  
と誕生し、日常生活のなかでより手軽に  
九谷焼を楽しめるようになってい

見るならココ!

石川県九谷焼美術館

いしかわけんくたにやきびじゅつかん



九谷焼発祥の地にあり、緑豊かな公  
園と一体化した庭園ミュージアムで  
す。古九谷・再興九谷から近代作家による  
作品までを展示しており、九谷焼の  
多彩な魅力が訪れる人に感動を与えま  
す。ミュージアムショップでは、スタッ  
フが厳選した作品の購入もでき、九谷  
焼の器を使った茶房古九谷でのひとと  
きもおすすめです。

☎ 0761-72-7466  
住 石川県加賀市大聖寺地方町1-10-13  
料 入館560円  
時 9時～17時(入館は～16時30分)  
休 月曜(祝日の場合は開館) P 32台



↑山浦早織:ポット/汲出碗



↑左から河本真詩:香合、中谷麻湖:コマ香合



↑工藤武:酒盃/片口



↑水元かよこ:Hyper

「何だろう」と思わず足を止めて見入ってしまうような工芸作品が並ぶ、ひがし茶屋街の路地に佇むセレクトショップ&ギャラリー。九谷焼を中心に、ガラスや金属から漆、水引まで、地元ゆかりの作家約80名の作品を、オーナーが選りすぐって紹介。2階

建ての町家の空間は、1階が店舗、2階が個展などを行うスペースとなっています。「さまざまな縁で導かれたモノや人との出会いを煌めかせたい」との思いが込められた店の中には、伝統工芸に軸足を置きつつも、時代の息吹や新しい感性を感じさせる作品が随所に。たとえば水元かよこさんの高杯は、によつきりと角を生やして自らの存在を問いつけ、獣医の経歴もある山浦早織さんは、酒器の足となつたサボテンに小鳥を絡ませるなど

興味が多岐にわたります。縁焔ならではの目利き力や発信力が注目を集め、愛好家や美大生までもがよく訪れる話題のショップです。



↑地元ゆかりの感度の高い工芸作品が、店内の至る所に

☎ 076-225-8241  
 住 石川県金沢市東山1-13-10  
 時 10時~17時 休 不定休 P なし



## 縁焔

●えにしら

器に破顔し、オブジェに瞠目  
 地元作家の煌めく感性に出会う

えびちゃ  
 唯一無二の葡萄茶の世界に  
 和と洋の感性が響きあう



↑和絵の具を中心に何十種もの色を使い分ける



↑器やアクセサリーなどの小物類も

成形から絵付けまでの一貫制作にこだわり、紋様はどれ一つとして同じものを描かないのは表現者の矜持。伝統を大切する一方で異素材とのコラボなどにも意欲的に取り組み、「九谷焼の世界がもっと広がれば」と挑戦の手を休めることはありません。

### 上端 伸也

金沢市出身。石川県立九谷焼技術研修所修了、九谷焼窯元での勤務を経て独立。日展特選、日本現代工芸美術展で現代工芸新人賞・現代工芸大賞など受賞歴多数



↑極細筆で描く紋様は一つひとつ表情が異なる

「予期せぬことでした」と上端さんが語るのは十数年前の旅先のパリ、ノートルダム聖堂での話。薔薇窓と呼ばれるステンドグラスを見上げた瞬間、頭の中の引き出しに貯めてあったアイデアや紋様、色、形などがどどん溢れ出て円形窓に収れんし、交錯する光の中でそれらが新しい表現世界を組み上げていくという何とも不思議な体験をしたのだそうです。

そこから導いた世界観を作品でどう表すか。素地や絵の具の検討を重ね、九谷焼で培った細描技術を駆使して編み出したのが「葡萄茶彩描」でした。洋と和の感性を共鳴させながら、アイボリーの素地に紫がかつた葡萄茶色で描き出す世界は独特の美を放ち、精緻にして無辺。見る人の心を捉えて離さぬ力を宿しています。



↑葡萄茶彩描初期の代表作「voyage」



←成形から絵付けの一貫制作による「塔」



## 九谷焼作家 上端 伸也さん

かんばた しんや